きょうこう

教育情報誌
vol. 51
2025年4月

巻頭インタビュー

●落語家

林家 たい平

いま欲しい、
落語国の住人たち

特集 令和6年度 第30回 日教弘教育賞

心に残る子どもたち
埼玉県川口市立青木中央小学校 校長
石川 庸子
福井県立福井商業高等学校 教諭
五十嵐 裕子

教職員の健康を応援 第3回
「健康と食事」
～漢方の視点から～

My Second Life〈vol.21〉
体育教師からいちご農家へ
ゼロからのスタート
渡邉 智之

わたしたちの学校自慢
●専門高校シリーズ〈vol.16〉
兵庫県立舞子高等学校

表紙紹介
茨城県常陸大宮市立大賀小学校

公益財団法人 日本教育公務員弘済会

わたしらしく

巻頭インタビュー

●落語家

林家たい平

いま欲しい、落語国の住人たち

profile

1964年埼玉県秩父市生まれ。87年武蔵野美術大学造形学部卒業。88年林家こん平に入門。92年二ツ目昇進。93年のNHK新人演芸コンクール優秀賞をはじめ、数々の賞を受賞し、2000年真打昇進。2010年武蔵野美術大学芸術文化学科客員教授に就任。2014年より一般社団法人落語協会理事。

●オフィシャルウェブサイト：
https://www.hayashiya-taihei.com/
●オフィシャルブログ「そら色チューブ」：
https://ameblo.jp/tai-hey/

地域に育ててもらった

紳士服の注文仕立て店を営む両親のもと、三人兄弟の末っ子として埼玉県秩父市で生まれ育ちました。忙しい両親のことをご近所さんもよく知っていて、夕ご飯を食べさせてくれたりお風呂に入れてくれたりと、何かと面倒をみてくれました。自宅前の独身アパートに住んでいる人たちは世話好きな母親を慕って自宅によく来ていましたし、地方から秩父の警察署勤務になったおまわりさんもしょっちゅう上がり込んでいました。家にはいつも誰か他人がいて、近所中がなんだかんだと大家族のようでしたね。

近くには荒川が流れ、山もあり自然が豊か。お寺も多く、毎日暗くなるまで境内で手打ち野球やかくれんぼをして遊んでいました。ガキ大将というよりも、友だちや大人たちを笑わせることの好きな、ひょうきんな子どもだったと思います。小中高校と自宅から徒歩10分圏内だったのでみんな顔見知り。地域の人たちに大切に育ててもらいました。

武蔵野美術大学造形学部へ

中学3年のとき、テレビドラマの熱血教師に憧れ、教師になる夢ができました。ところが高校で成績は落ちるばかり。450人中、下から数えて何番目という状況に。それでも教師になりたいという僕に、高校2年の担任が「美術大学に進み、美術教師になるなら間に合うかも」とアドバイスしてくれたのです。「小さなことで感動できる心を自分の中に養っておきなさい」と諭してくれた美術の村井先生でした。

美大合格に向けて一念発起した僕は、授業後に美術室に通ってデッサンの勉強をし、美術予備校の日曜講習を受けるなど、出来ることは全てやりきりました。そして、武蔵野美術大学造形学部に入学することが叶ったのです。学費も生活費も自分で稼がなければならない苦学生でしたが、「デザインは人を幸せにする」という教授の言葉に感銘を受け、希望をもって学業とアルバイトに励みました。

落語家を目指す

大学3年生のある夜、課題の作品制作中にラジオから落語が流れてきました。聴くともなしに聴いていたのですが、いつの間にか落語の世界に引き込まれ、ゲラゲラと笑い、聴き終えたときにはざらついた心が温かくなり幸せな気持ちになっていたのです。衝撃的な出会いでした。落語でこんなに心が明るくなるなんて思いもよらなかった。ひょっとしたら、人を幸せにする落語とデザインは、本質が同じなのではない

長崎県の伝統工芸「波佐見焼」の絵付け。制作をライフワークとしている

嚴島神社国宝高での落語奉納

埼玉県秩父市の両親と。真打昇進後、両親のためだけに実家の仏間で落語会を開いた。演目は、奉公に出ていた息子が田舎の両親に親孝行をする「藪入り」

のか。それならば落語という絵具を使って、人の心を塗り替えるデザイナーになればいい。落語で人を幸せにしよう、落語家になろう。そう思ったのです。若さって凄いですね。それからです。無料チケットを手に入れて寄席に通い、古典落語を覚え、落語家への道を模索し始めたのは。

様々な挑戦をして自分を鍛えたものの、自分のような普通の人間がプロの落語家になれるのだろうか。なっていいのだろうか。その答えを求めて、大学4年になる前の春休みに15日間の旅に出ました。上野から奥の細道をたどる一人旅です。下駄を履き、褌をしめて着物を纏い、古典落語2席を覚えて東北を回りました。旅の途中の宮城県石巻市。高齢者施設でたくさんの笑顔に勇気をいただき、「落語家になります」と遂に宣言。プロとして生きる覚悟が定まった瞬間でした。

22歳で林家こん平の門を叩き行儀見習いから始め、内弟子生活6年半、前座、二ツ目、真打と、落語家の道を39年歩ませていただいています。

師匠こん平から教わったのは、落語の技術ではなく、人としての生き方でした。社会の一員としての立ち居振る舞いや礼儀作法、人との付き合い方などです。今も、「師匠だったらどう思うだろう、どうするだろう」と考えます。

落語国の住人たちの多様性と他者理解

落語の長屋噺では、「ご隠居さん」「大家さん」「八っつぁん」「熊さん」「与太郎」と、貧しいながらも日々の生活を楽しみ、地に足をつけて生きている庶民の姿が描かれています。誰かを排除することなく互いを面白がり、そして助け合う。困った人を放っておけない人々が「落語国の住人たち」です。

そんな落語国の住人たちと付き合っていると、SNSで世界の裏側と繋がるよりも、隣の人と繋がろうよ。そう言いたくなってしまう。世界中の知らない人たちと繋がれるのは夢があるけど、電話さえなかった時代に幸せに暮らしていた落語国の人々がいたことを知ってほしい。他者と比較したり、自分と異なる意見に耳を塞いだり排除しがちな今の時代にこそ、落語を聴いて笑って欲しいと思うのです。

「子ども寄席」や「親子落語会」に招かれていくと、子どもたちの柔らかい感性に驚かされます。子どもたちの想像力は、大人より優れていると感じることも多いですね。大人は言葉に引っかかると思考が止まってしまう。子どもたちのほうが、落語を感覚で大きく捉えることができるのかもしれません。耳で聴いて頭の中に絵と物語を描く。落語は、想像力で楽しむ伝統文化でもあるのです。

学校は子どもたちの特性を試す機会に満ちている

僕は小学生のとき徒競走が苦手で、運動会も嫌いでした。途中でわざと転んだりしてね（笑）。ところが中学生で8kmの長距離走を走ったとき、長距離が得意なことを発見したのです。とても嬉しかった。同じ陸上競技でも得手不得手があることを知りました。

車だったら、スポーツカーは速く走れるけどショベルカーのように穴を掘ることはできないとか、車種ごとの特性がありますね。自分が乗っている車なのに使っていない性能がいくつもあったらもったいない。学校は、子どもたちの特性を試す機会に満ちている場だと思います。運動会や学芸会などの行事にもその機会はたくさんありますし、先生との出会いで人生が変わることもあるでしょう。高校2年の美術の先生との出会いがなかったら今、林家たい平は存在していませんから。

早いもので還暦を迎えました。最近、出来ることばかりやっていると自分が錆びついていくなと感じています。今まで出来なかったことや苦手だと感じていたことに敢えてチャレンジし、体も心もフル回転させて、錆びない大人で居続けたいですね。

読者の中から抽選で3名様に、林家たい平さん直筆サイン入り書籍をプレゼントします。

『林家たい平　特選まくら集　みんなの笑顔に会いたくて』

応募は、はがきに**①住所②氏名③電話番号④ご所属の学校名（組織名）⑤本誌の感想**をご記入のうえ、以下の宛先までご郵送ください。

■**応募宛先**：〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6
（公財）日本教育公務員弘済会
「きょうこう vol.51 プレゼント」事務局
■**締　　切**：2025年7月31日（木）必着
※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます

特集

令和6年度
第30回 日教弘教育賞

最優秀賞の受賞者2名にインタビュー

「日教弘教育賞」は、公益財団法人日本教育公務員弘済会が行っている事業です。
教育関係者が使命感をもって日々行う教育実践の報告の場として、教育実践研究論文を募集し、学校教育の向上発展に寄与する優れた実践研究を対象に、助成を行っています。今回は最優秀賞2名の受賞論文およびインタビューを紹介します。

中学校区一体で取り組む不登校対応
― 小学校教員を中軸にすえることに焦点をあてて ―

大阪府堺市立深井小学校 校長　服部　倫子

1 はじめに

近年、不登校児童生徒数は増加し続け、生徒指導上の喫緊の課題となっている。令和5年3月文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLOプラン）では、不登校児童生徒の個々のニーズに応じた受け皿を整備し、対応するよう示され、各学校では既に取り組んでいることであろう。

筆者は、これまで児童家庭支援についての研究に取り組み、児童と家庭を一体的に捉えた福祉的援助支援は必須であると考え、連携・協働するチーム支援を進めてきた。前任校（以下、A小学校）は、校区内に母子生活支援施設があり、厳しい家庭環境で生活する児童や不登校児童が多く在籍しており、児童家庭支援が大きな課題となっていた。そこで、A小学校において、SSWと協働した校内研修（3年計画）を実施し、筆者転任後も持続可能な児童家庭支援体制の構築をめざした。研修最終年度の令和5年には、全職員がチーム支援できるまでに組織は成長し、成果が見え始めた。

2 取組の背景と目的

堺市では、令和3年度第3回総合教育会議において、中学校区を構成する小・中学校を「学校群」という1つの単位と捉え、総合的な学力の育成にむけて一体的に取り組むことが示された。A小学校を含む学校群は、2小学校（A小学校とB小学校）1中学校からなる。令和4年度はモデル校に指定され、令和5年度より学校群のスケールメリット（人材等）を活かした様々な特色ある取組をスタートさせた。そのひとつである不登校対応は、3校共通の大きな課題である。そこで、3校長で話し合い、A小学校のこれまでの児童家庭支援の取組成果の積みあげから、筆者が生徒指導・不登校対応についてマネジメントすることになった。筆者は、A小学校でのこれまでの取組から、小学校教員が中学校区不登校対応の中軸を担い、9年間の継続支援を行えば、子どもは学校に居場所を見つけ、自信を生み出すことができるのではないかと仮説を立てた。そこで、学校群のスケールメリットを活かして3校を兼務する加配教員をA小学校に配置して、学校群を一体と捉え継続性のある児童生徒支援体制構築のための活用方法と取組の手だて（表1）に着手した。仮説の検証は、子どもの変容から整理・分析する。また、加配教員の配置については、校長の努力だけでは難しいが、知恵と工夫で人材確保が可能ならば、この取組が他校の不登校対応の参考になるのではないかと考え、報告する。

表1：学校群児童生徒支援体制の構築・運用の実施計画

取組内容・方法	・学校群児童生徒、家庭支援体制の構築、継続的な支援 ・ケース会議運営、関係諸機関との連携、家庭訪問 ・不登校、一時保護期間中の学習遅れのある児童生徒への学習支援 ・学力向上やカリマネ担当と連携して不登校等児童生徒の学力向上の支援 ・学校群約30名に上る転入児童生徒の学校生活スタート支援 ・SNS上のトラブル未然防止のためのネットリテラシー教育
到達目標 （成果物含む）	・学校群生徒指導委員会組織体制表 ・児童生徒家庭支援記録資料 ・学校群生徒指導委員会の運営、ケース会議等実施記録資料 ・関係児童生徒家庭の個別の支援カルテ（小中共通）
想定される効果	検証項目 ・児童生徒家庭状況の改善 ・不登校児童生徒出席日数・時数並びに対面対応（電話対応含む）
	検証内容（検証方法） ・不登校等児童アンケート ・日数、時数、対面、電話対応の回数

3 取組における校長のマネジメント

校長として3つのマネジメントを講じた。まず、組織マネジメントとして、取組の要となる加配教員は、あえて授業力・学級経営力が高く、ミドルリーダーとして存在感ある教員とし、A小学校の教師力の底上げも図る人材を選任した（以下、C教諭）。C教諭は、生徒指導担当の経験はなかったが、不登校はA小学校の課題と認識していた。そこで、C教諭には、未知の分野を校長とともに学ぶよい機会として捉え、また、未経験だからこそ先入観なく俯瞰して状況判断ができること、学習指導力の高さは学力面で子どもを援助できることから、適任であると伝えた。学級経営力の高い教員を3校兼務に充てることは、校長として学校経営上大きな痛手と覚悟したが、C教諭は、校長の意向を見据えた動きと、よい視点で企画を生み出し、主体的に取り組み、見立ての通りの持ち味を発揮した。このことから、人選の重要性を改めて知ることとなった。

次に、環境のマネジメントとして、C教諭の成長の場を整えた。校長と常時情報共有する場、教員と行政とをつないで知識と専門性が更に高められる場、月1回SSWを派遣要請（配置校ではないため）して支援の進捗や課題等が相談できる場をつくった。更に、A小学校の最終年度の校内研修をC教諭に任せて、現状と課題・次に為すべきことを主体的に考える機会とする場の設定をした。大切にしたのは、育成を図る環境づくりと同時に、一人で任務を背負うことのないようチームで取り組み、ストレス軽減を図りながらのびのびと取り組める環境を用意することである。

3つめの機能的な運営のマネジメントについては、以下の取組の報告の中で述べる。

4 取組の概要と子どもの変容

(1) ステップルームの開設・運営

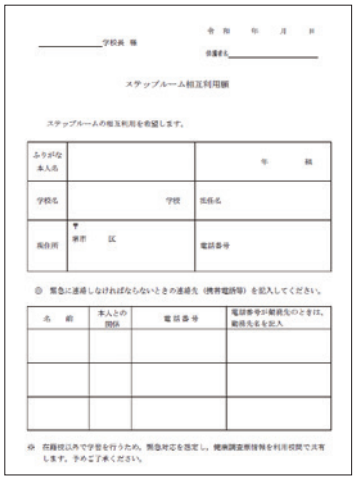
まず、不登校傾向にある子どもたちのための居場所・多様な登校の一つとして、「ステップルーム」を3校に開設した。子どもが安心して過ごし、教員との関係づくりを深め、自信を生み出す場を理想とした。C教諭が3校のルームを曜日ごとに巡回し、運営の中軸を担った（表2）。

表2：兼務スケジュール（ステップルームの運営）

	月 中学校	火 B小学校	水 A小学校	木 A小学校	金 B小学校
朝学活	家　庭　訪　問				
1	学習支援 家庭訪問・電話連絡・お迎え 担任・ＳＣ・ＳＳＷと連携 関係諸機関と連携・訪問				
2					
3					
4		↓	↓	↓	↓
5					
6	↓				
放課後	個別のケース会議・打ち合わせなど				

中学校では、中学校生徒指導主事と協働し、担任等ともかかわりを持ちながら進めていく。相互利用の手続き（図1）をすれば、子どもたちは3校どのステップルームも利用可能とした。例えば自校2回、他校1回で週に3回利用することもできる。学校間の移動は在籍校教職員が付き添う。また、災害共済給付制度の審査対象とすることで安全面は確保した。

図1：ステップルーム相互利用願


ステップルーム相互利用願

令和５年約１０人の利用から始まり、令和6年7月現在、利用者の実人数は23人（A小学

校6人、B小学校8人、中学生9人)、延べ人数は512人である。聴覚過敏や気持ちが落ち着かない、がんばらなくてはと思って気持ちが疲弊する、といった子どもたちにとって、ステップルームは一息つける場所となってきている。ステップルームにおけるC教諭の支援と利用する子どもたちの様子と変容について、次に述べる。

<定期的に登校できた事例>

これまで精神的に不安定になる時期があった当該児童は、週2回必ず来室し、まず、教室と同じ学習をそのまま取り組む。さらに、漢字プリントを終えると、タブレットで絵を描く、プログラミングをするなどリラックスして過ごしている。利用を始めてから長期欠席や保健室で休む回数が減少し、ステップルームが精神的な安定を図れる場となっている。

<学習する場所を自分で選択できている事例>

不定期利用の児童2人は、気持ちがつらくなる前に担任に申し出て来室、授業途中の場合もある。教室の学習と同じ内容に取り組み、担任にノート等を提出している。国語や総合的な学習の時間などは、単元の何時間目を学習しているかをC教諭が判断し、おおよそのねらいを定めて学習を進める。道徳では、その場で教材を確認し、内容項目をおさえて適切な学習指導を行う。全学年・全教科の指導経験がある小学校教員は、指導に困ることはなく、そのよさが活きる。中学生の学習指導では、教科の専門性には及ばないが、基礎・基本を指導することで学習の底上げが図られている。

<自信が登校の動機となった事例>

2週間に1回程度、渋々登校し来室する新規利用の中学生は、数学・英語のワークを中心に学習していた。家庭科の製作物に取り組んだところ、週1回決まった時間に来室するようになる。製作中の集中力は素晴らしく、家庭科教員から称賛され、自信になった。これ以降、定期的に来室するようになる。C教諭がその変化を見逃さず、得意な家庭科・美術に加え、これまで通り数学・英語の学習にも必ず取り組むようにし、やる気を少しずつ引き出した。すると、普段は筆箱のみ持参する無口な当該生徒が、「お母さんと一緒に買いに行った。」と自分で購入したワーク2冊をかばんから取り出した。自信が行動につながったのである。

ステップルームは子どもの自信を育み、自立を促す場としての機能をもつ。次に、友だちとのトラブルにより開室当初から利用する生徒の変容を「自信ポイント」として示しながら紹介する。令和5年1学期途中から登校しない状況が続いた当該生徒は、6月末に初めて来室した。7月2回通室後、生活リズムの乱れから9月以降も隔週利用にとどまっていた。そこでC教諭は、当該生徒と1か月の予定をカレンダーに書き込み可視化し、10月の目標を「中間テストでは3教科受ける」と定めた。これ以降、登校は週3日となり、開室しない日は中学校生徒指導主事や学年団が対応、2学期終了頃には週3回の登校が定着した。単元ごとの学習が可能な理科を優先的に取り組み、課題のワークをすべて仕上げることができた(自信ポイント①)。3学期の目標は「週4日登校、期末テストは5教科受ける」とし、5教科を教室で学習し、他教科はステップルームで過ごした。冬休みの英語スピーチ課題では、普段は家で学習しない当該生徒が練習を重ね、英語教員の前でスムーズに発表した(自信ポイント②)。目標通り期末テスト5教科を受検、前回より点数が伸び、数学では平均点近くまで到達した(自信ポイント③)。進級した現在、ほぼ毎日登校し、教室で5教科を学習している。家で学習する習慣もついたようで、生徒指導主事と「5教科で200点」を1学期の目標に掲げ取り組んだところ、結果は+40点であった。理科は平均点を上回り、嬉しそうに職員室にいるC教諭に報告に来た。近くにいた教頭・校長に拍手で喜んでもらい、普段は見せない笑顔であった(自信ポイント④)。

学習不振から不登校につながるケースは少なくない。C教諭は、中学生の教科指導では当該生徒と一緒に学習しているのだと言う。小学校教師が学習指導をするよさは、具体化したり、見えないものをイメージさせたり、小学校の学習まで引きさげて伝えられることだと考える。例えば、グラフの傾きは滑り台、電圧はウォータースライダーなど、絵や具体物を

使って考えたりすると分かりやすい。また、二次方程式での計算のつまずきは、小学校算数の既習事項から復習できたりすることから、「自分は勉強がわからない」という気持ちのハードルをさげることにつながっている。

<6年児童の卒業・進学の準備の場となった事例>

小学校卒業から中学校入学という大きな変化を伴う期間をどれだけ切れめなく接続するかは重要である。

4年から不登校でC教諭の支援が入らなかった児童Dは、中学校予備登校日には個別対応することができた。別枠時間を設けて靴箱や教室等の導線を確認、中学校教員から説明を受けるなど、中学校生活のイメージが持てるように支援した。入学式後も個別対応を行い登校することができた。その後2回通室した。

次に、6年2学期から教育支援教室、1・2月はステップルームに通室した児童である。当該児童は、3月に入ると「中学校からがんばるから今は休む」と自分で決めた。進学後しばらく教室で過ごしたが、やはり継続できなかった。だが、一度ステップルームでの過ごし方を経験していることで、その後は再び登校を始め、継続的に通室できている。予備登校日に個別対応した前述の児童Dは、2回の通室後、再び登校できない日が続いている。だが、この児童と同様、ステップルームのイメージができていることから、登校するストレスのハードルは低く、気持ちが前向きになったときには、再び来室ができると考えられる。

6年生の不登校児童にとっては、修学旅行、卒業アルバム写真や文集、連合運動会、クラブ体験、卒業遠足等、どれも不安が大きい。これら全ての活動に見通しをもたせ、どのような形で参加できるか、ずいぶん前から児童たちと相談しながら取り組んでいく指導も成果があった。詳細は紙面の関係上、割愛する。

4月、不登校であった新入生7人中3人は教室で、3人はステップルームで中学校生活をスタートさせた。その後は、2人のステップルーム通室にとどまっている。この状況をC教諭は、今は充電期間だと捉えている。この期間を過ぎれば、再びステップルームや外部機関を利用して、社会とつながることができると考え、その時が来たときの準備をして待っている。

このように、ステップルームは、精神的に支える機能、学習保障をする機能、居場所としての機能など、日常子どもがつまずきやすい状況を支援する機能も果たすことができる。

(2) 多様な形を活かした家庭訪問

A小学校では、不登校対応は担任が行う傾向が強く、家庭訪問は、担任が放課後に行っていた。だが、不登校の子どもは、放課後以降の時間帯は比較的元気で、その様子から心配ないと捉えられることも多い。原(2013)は、「不登校児の心理的なプレッシャーは、登校しなければならない朝の時間帯から昼の時間帯まで極めて高い状態になり、(略)放課後の時間帯には、通常のレベルに低下していく」と述べている。

一方、C教諭・SC・SSWは日中に訪問することが可能である。担任と連携し、C教諭・SC・SSWには、子どもたちが学ぶ同じ時間帯の訪問を重点的に取り組んでもらうこととした。そして、ありのままの子どもの姿から見立てを行い、新たな改善策を立てるようにした。

また、多様な人たちが家庭訪問へ行くことは、子どもの話したい相手の幅を広げることにつながった。このように、加配教員の配置は学校事情に合わせた対応ではなく、個に応じた時間の使い方が可能となった。

お迎えによる登校指導は、子どもに安心感を与えることができた。また、保護者の送迎の負担を減らし、家庭都合で登校できない子どもを支援できている。お迎えに行っても一緒に登校できないときは、その場で学習指導をする。子どもが顔を見せないときは保護者との関係づくりに努めるなど、時間に制約がないことで臨機応変に対応している。B小学校や中学校の支援でも、初期段階は、担任がC教諭へ情報共有や家庭とのつなぎを行うが、取組が継続していくと、子どもとC教諭との間に必然と関係性が生まれ育つ。つまり、C教諭が3校すべての子どもたちの成長段階を見届けながら支援できるのである。

約10人の家庭訪問を行う中で、現在も4人の児童

生徒について、週1回～2回の継続訪問をしており、そのうち3人は訪問時、寝起きの状態である。訪問時間を決めている生徒は、訪問チャイムで起きたり、寝ずに起きて待ったりの生活状況であった。ところが、訪問を続けることで、次第に時間を意識できるようになり、起きてC教諭を迎えたり、放課後に月1回程度登校したりする姿が見られるようになった。

場面緘黙児童の家庭訪問では、当該児童の顔はなかなか見れないが、学校で会うことが難しい保護者と話す中で、先の進路について一歩進めることができた。

5 成果と課題

本実践を通して、不登校の改善が見られたのは、1年以上経って初めて学校に登校できた児童が1人、1か月以上登校できない児童の不登校解消が7人、不登校傾向にあった児童の改善が5人である。他にも、一歩前進しては、停滞や後退を繰り返しながらも、再び動き出そうとする子どももいることから、自分の拠り所や居場所を見つけることにつながっていると考える。一方、登校の改善まで至っていない児童も3人いる。引き続き児童生徒とつながりを持ちながら、粘り強く個に応じた支援を継続していく。

C教諭が3校の不登校対応を担うことでそれぞれのステップルームはフル稼働し、子どもたちは相互利用で多様な学びを自分で選択することにつながった。不安感につながる学習の遅れは、小学校教員の強みで補えている。子どものアンケートからは、「自分のペースで学習できるのがよい。」「わからないところをすぐに質問できる。学習の遅れがあるが必要最低限の学習ができる。」の回答があることから、学習の進捗を把握しながら指導し見守る教師がいることは、子どもにとって支えとなっていることがわかる。

教職員の取組への認識が浸透し、必要感も高まる一方で、児童生徒がステップルームをよく知らず、利用につながらない現状も見えた。今後、児童生徒に向けた周知の仕方を工夫し、利用を促していく必要がある。

6 まとめ

橋本・庄司（2018）は、不登校生徒への支援を、「〈認める人〉であること、〈待つ人〉であること、不登校は大切な〈充電期間〉だと位置づけること、〈何もしない人〉であること」とまとめ、この視点からどう支援するかについて述べている。C教諭のように不登校支援専属の小学校教員を配置することで、子どもの心理状況がどの段階なのかを把握し、たとえば充電期間であれば見守る姿勢を続け、外へ気持ちが向いてくる時期であれば、タイミングを逃さずとらえ、次のステップへと導くことができる。児童生徒・保護者・担任が、進級のたびに新たな関係づくりや情報共有に時間を要する負担も、不登校支援専属の小学校教員が、年度をこえてかかわり、架け橋の役割を果たすことで軽減できる。そして、これまでの経緯や積みあげてきた支援内容が引き継がれ、互いの関係性を良好に保つことにつながる。これらは、小学校教員が中学校区の不登校対応を担う体制をつくることによって、子どもの成長を見届けることができるからこそ可能といえるのではないかと考える。今後もこれら取組の先に、不登校の子どもたちが、学校でも自分らしさや居場所を見つけられることを願う。

7 おわりに

筆者は、引き続き児童家庭支援についての研究を進め、次年度これらの取組を現任校で実践し、成功事例を積みあげたいと考える。また、3校兼務の加配教員に、主力教員を据えることに迷いはあったが、結果的に自校の大きな戦力となった。この人選のマネジメントは、以降の組織体制づくりに活かされ、校長としては願ってもない産物も得られたことをお伝えし、報告を終える。

［参考文献］

原英樹（2013）
「不登校の基本的な性質とその対応について」
『神奈川大学心理・教育研究論集』33巻, P.73-78

橋本怜/庄司和史（2018）
「不登校生徒への支援を考える」
『教育実践研究』2巻,P.3-10

服部校長へインタビュー

1. 受賞されたご感想や今回の研究で得たものについて教えてください。

この取組を実践し、子どもたちの変容に手応えを感じ、「より多くの学校に知ってもらいたい」「更に実践を積み上げたい」という思いを抱き、論文にまとめました。そんな中、「快挙です」と一報が入り、驚きとともに、このアプローチが多くの関心を集め、更に発展・応用が広がる可能性に期待が膨らみました。名誉ある賞をいただき、発表の機会を得たことで、この研究成果が教育分野に新たな可能性を生むかもしれない、その入り口に立てたことに感謝申しあげます。

2. 今回の取り組みを進める上での課題や、苦労した点を教えてください。

取組を進める上で、様々な課題や苦労はありましたが、ここでは校長として感じたことをお伝えしようと思います。小学校教員を中学校区の不登校対応の中軸に据えるという斬新な取組を実現するためには、人的リソースの確保という点で、優秀な教員を選び、その兼務体制を構築する必要がありました。しかし、取組は成功させたいが、優秀な人材の力が3分の1しか残らないという状況は、校内での影響が大きく、学校経営にかかわる重大な課題でもありました。また、候補に挙げたC教諭は、生徒指導関係の分掌は未経験だったことから、能力を十分に発揮できるかという不安要素もあり、この決定には組織運営の観点からも慎重かつ大胆な決断が求められる場面でした。まさに、校長のマネジメントが問われる瞬間だったと感じました。結果的に、C教諭は、クラスを担任する以上の戦力となり、校長の意向を見据えた動きとよい視点で、主体的に取組を推進しました。校長としてのマネジメント力が大いに試される場面でもあったと感じています。

3. ステップルームの運営や継続支援について、特にポイントとなった点があれば教えてください。

ステップルームの運営や継続支援において、特に重要だったポイントは、次の通りです。①安心できる居場所の提供 ②フレキシブルな利用方法の導入 ③個別支援の重要性 ④加配教員（C教諭）の役割 ⑤子どもたちの変化の見逃し防止 ⑥ステップルームの認知度向上 です。これらのポイントは、子ども一人ひとりに寄り添い、長期的な支援を可能にするための工夫として非常に意義深いものです。特に、「安心できる場」として機能し続けることが、ステップルームの運営を成功させた最大の要因と考えています。これらの取組が、他校の支援体制にとっての参考になればと思います。

4. 研究を通して、先生や児童・生徒にどのような変化がありましたか？

児童・生徒の変化としては、「自信の向上と前向きな行動」「生活リズムの改善」「得意分野の発見」「コミュニケーションの発展」など、多くの前向きな成果がみられました。一方、教員には、「支援スキルの深化」「チーム支援の認識向上」「柔軟性と共感力の成長」といった変化が見られました。そして、学校全体の変化としては、「支援体制の進化」「不登校支援の意識改革」が挙げられます。これらの変化は、単なる一時的な取組成果ではなく、児童・生徒や教員にとって、継続的な学びと成長の基盤となっていると言えます。

5. 不登校児童生徒の支援について、試行錯誤を重ねている先生方が全国にいらっしゃると思います。メッセージをお願いします。

継続的な不登校対応には、やはりマンパワーは必要だと強く感じます。知恵と工夫で人材確保が可能ならば、C教諭のような専属教員の存在は重要で、学年間や学校間を超えた継続的な支援が可能となり、子どもたちが安心して相談できる一貫した環境が整います。これは、不登校の子どもたちが信頼関係を築きやすくなる点で有効です。更に、同じ教員が長期間にわたり子どもたちに関わることで、小さな変化や成長を見逃さず、それに応じた適切なサポートが可能になり、子どもたちの自信回復や意欲向上が促進されます。また、専属教員は、チーム支援の中心的な役割を果たし、他の教員や専門スタッフ（SSW・SCなど）との連携を円滑に進める力を発揮し、中学校区全体の支援体制が更に強化されます。一方、中学校区において小学校教員が中軸を担うことの良さは、小から中学校への移行期も含めて長期的な支援を可能にします。この継続性は、子どもたちにとって一貫性のある成長の場を提供する重要な基盤となります。また、小学校教員は、全教科を指導する経験を持つため、不登校児童・生徒の学習遅れを幅広くカバーし、基礎的な力の回復を支援できます。柔軟で具体的な指導方法を活かし、子どもの「わからない」を解消しやすいという利点も持っています。不登校支援においては、すぐに成果が見えることばかりではありません。私たち教員の忍耐強さと継続的な取組こそが、子どもたちの未来に大きな影響を与えると信じています。

表彰式での輝かしい笑顔。
写真右が服部校長

共創活動を通した支持的風土の醸成と自己表現豊かな児童の育成

― コロナ禍で制限された表現活動の喜びを体得させる学級合唱県一位への挑戦 ―

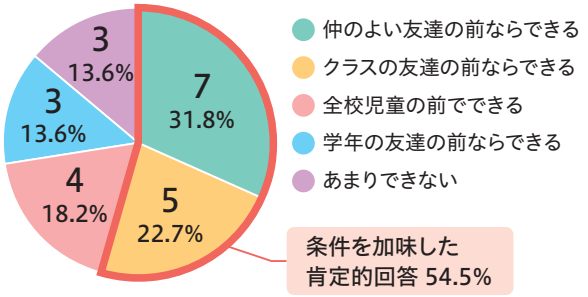
沖縄県沖縄市立越来小学校 教諭　荒谷　恵友美

はじめに

コロナ禍では「三密回避」のもと、児童が近づく活動や声を出す活動に大きな制限がかけられた。昨年度受け持った児童は、1年生の春休みに全国一斉休校が行われ、学校生活のほとんどを感染症予防と共に過ごしてきた。一人一台端末の活用も相まって、授業でも休み時間でも「各々」という言葉がぴったりの5年生である。集団や人前での表現活動に苦手意識が強く、常にマスクを外したがらない児童もいた。みんなで活動する楽しさや表現する喜び、それらの経験を通して得られる一体感や達成感を味わわせたい。コロナ禍で経験できなかったこと以上の経験をさせたい。そのような思いを抱きながら、5年2組の学級経営がはじまった。

1　学級の課題と研究仮説

実態を探るため、年度初めにアンケートを実施した。自己表現について、自信のある児童は全体の18.2%に留まった。全く自信のない児童が9.1%いる一方、「仲のよい友達の前ならできる」等、条件を加えれば半数以上の児童が肯定的な回答をしていることに着目した。この結果は、一定の人間関係においては自己表現がしやすいことを意味する。逆に、表現力の育成には安心できる人間関係が欠かせないことがわかった。



【4月生活アンケート】人前での発表や特技の披露に自信はありますか

人前に出られない理由には「色んな人の視線が怖い」「笑われるかもしれないという不安がある」等が挙げられ、聞き手の反応や他者評価に強い不安を示していることが明らかになった。アンケート結果から、表現活動への自信は安心から生まれると分析。支持的風土と発表形態の工夫があれば、児童が安心して表現できると推察した。通常の発表は、聴衆より発表者の方が少数である。しかし、その方法では他者評価を恐れる児童の心理的障壁が払拭されにくい。そこで、以下の仮説を立て、コロナ禍で制限のあった表現活動を実践した。

【仮説】全員が発表者となる共創活動を継続することで、安心感や所属感が得られ、豊かな自己表現が可能になると同時に、集団のよさが実感できるだろう

本研究における共創活動とは、仲間と共に認め合い、支え合いながら一つのものを創り上げる活動で、完成までの過程を十分に味わうことができ、児童の意欲や創意工夫が反映されやすい活動と定義する。

2　学級合唱への挑戦

(1)　学級合唱への期待

学級合唱は、まさに全員参加の共創活動であり、ひとりひとりの豊かな表現が求められる。もともと本

県は音楽発表会が盛んであり、各地区で審査を経て代表校が選出される。憧れの舞台で歌うことで表現する喜びが得られ、勝ち上がればクラス全員で大きな達成感が味わえると期待した。

児童に興味を持ってもらうため、年度初めに掲げる個人目標に、自身は「合唱」と記し「歌声だけでなく、本読み、あいさつ、返事、日頃からみんなで声を合わせて、まとまりのある学級にしよう」と話した。

4月 児童の作品と並べて掲示した担任の目標「合唱」

(2) 安心と自信を育む練習の工夫

合唱は練習の成果がでるまでに時間がかかるうえ、得手不得手が表れやすい。当然、合唱にあまり意欲的でない児童もいる。そこで3つの策を施した。

①見通しが持てる月別目標の掲示

前年度の児童を知る音楽専科に協力を仰ぎ、練習内容の計画を立てた。今月何を目指すのかを、担任・専科・児童で共有し、合唱完成までの見通しが持てるよう、教室の壁面に月別の目標を掲示した。

②全員が「できる」「やりたい」活動からスタート

人気歌手Adoの曲で踊る児童

マスク生活に慣れている児童は、そもそも口を大きく開くことに抵抗がある。練習を始める前に、児童が好きな流行りの楽曲をかけ、みんなで踊ったり歌ったりすることで集団の楽しさが感じられるようにした。自己表現が苦手な児童には歌詞カードを作成させたり、練習の準備や片づけをお願いしたりと、個別に役割を与えることで参加度を高めた。

③児童のレベルに適したモデルの提示

児童は学習モデルを見たとき、「真似できそう」と思えると主体的に取り組めるが、「絶対できない」と感じた途端、他人事として捉えてしまう傾向にある。そこで、児童のレベルに適した学習モデルを複数用意した。学習モデルの動画は完成イメージの共有にも役立ち、理想とする表現を目指して練習に励むことができた。

(3) 支持的風土の醸成

豊かな自己表現の根幹となる支持的風土の醸成を目指すべく、日常生活でもペア活動やグループ活動を計画的に取り入れた。スモールステップをふませ、表現活動の成功体験を重ねることがねらいである。

月	月別目標	他教科との往還
4	学級に慣れよう	国語や算数でのペアによる話し合い活動
5	音を取ろう	学活の時間を利用してリーダー像を共有し、パートリーダーを選出
6	ハーモニーを作ろう	特別活動と関連させたグループ課題解決活動
7	強弱をつけよう	夏休み前のお楽しみ会を児童中心に計画 主体的な活動の成功体験を積ませる
8	安全に気を付けて	
9	歌声を届けよう ♪校内音楽発表会	道徳の時間に他者と協働するよさを伝え、集団活動の意義を見直す
10	歌詞を意識しよう	互いのよさを認め合うため１８番大会実施
11	ホールに響く美声 ♪地区音楽発表会	社会科や国語科でグループによる発表活動 男女混合のグループで仲を深める
12	合唱の集大成 ♪沖縄県音楽発表会	作りたいものを自分たちで決める、お楽しみ調理実習を通して意思決定や合意形成を図る
1	さぁ夢の舞台へ ♪全琉音楽祭	合唱練習の際、表現で工夫したいことについて児童の意見を聞き、伝え合う力を高める
2	最高の卒業式へ	いい卒業式になるよう在校生としてできることを考え、卒業生を祝福する
3	感謝の気持ちで	キャリアパスポート等を活用し、理想の自分について考える

月別目標と往還させた活動内容 ♪は各発表会

普段あまり関わりのない児童同士が主体的に対話し、共創できる授業を意図的に増やした。全員が話

し手と聞き手を繰り返す中で、どんな風に聞いてもらえたら嬉しいかを体験的に理解し、支持的風土に欠かせない聞く態度の向上も見られた。

以前のアンケートで発表に不安を感じるとしていた児童も、全員が発表する流れの中で自然に発表することができた。集団の受容的な雰囲気や、友達の頑張る姿が励みになったようだ。発表後はストリート機能を活用し、すぐに全員に感想を入力させ、互いのよさを伝え合った。温かいコメントが発表の自信へとつながった。

国語グループでの発表

発表後のコメント抜粋

陸斗 14:59
まとめ方や理由がよかったなと思います。

玲和 14:59
安慶名玲和
発表がすごく分かりやすかったし、声も聞きやすかったです。

康誠 15:01
花城康誠
2グループの発表は全員がハキハキと発表してよかったです

係活動にも工夫を凝らし、児童が楽しく関わり合う機会を作った。自身も毎日一人一問漢字の読みクイズを出し、必ず正解させほめて帰宅させた。

友達の誕生日を祝う乾杯係

下校前、担任からのクイズ

係活動の例

乾杯係	誕生日や努力したこと等、給食の時間に乾杯する
ピカピカ係	清掃時間に一生懸命働いていた友達を発表する
注目係	授業開始時の号令のときいい姿勢の人をほめる
クイズ係	帰りの会で、その日学習した内容からクイズを出す

支持的風土が醸成されてくると自己表現に対する安心が生まれ、合唱においても胸を張って歌う姿が見られるようになった。全員で同じ目標に向かって取り組んでいるため、学級にも一体感が出てきた。

(4) モチベーションの維持・向上

練習の成果があり校内代表に選ばれたものの、これまで発表会に出場経験のない児童は、6年生に勝てた満足感でどこか気が抜けていた。そこで、校長をゲストティーチャーに招いた特別授業を行った。

小規模校での合唱は決して当たり前ではないこと、職員が子どもたちの可能性を最大限に引き出すために一丸となっていることが伝えられ、合唱ができることへの感謝の気持ちを高めた。また、児童が大好きなプロスポーツ選手の話を聞き、努力することの大切さを学んだ。校長はその後も音楽室や体育館に

特別授業を行う校長

話を聞き、考えを深める児童

足を運び、歌声を聴いて感想を述べ、児童のやる気を引き出した。

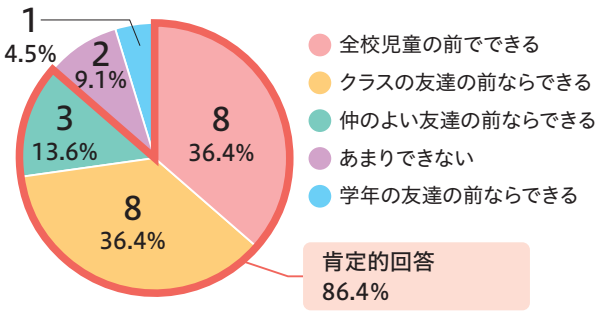
次第にハーモニーを作る楽しさを見出し、張り切って人前で歌う姿が確認できた。これまで他者の評価を恐れて自己表現を控えていた児童が、いつの間にか他者からの評価をモチベーションにするまでに成長した。ここに、全員で表現する学級合唱の強みがある。「一人で歌うのは恥ずかしいけど、みんなとなら楽しい！」内気な女の子が笑顔を見せた。

3 共創活動の効果

合唱は一人や二人では表現できない歌声の重なりや音圧があり、全員が集うよさを感じることができる。努力が成果に繋がる過程が実感できるのもよい。12月の県大会が行われる頃には、目標としていた集団で表現する喜びを体得できるようになっていた。合唱を通して以下の変容が見られた。

(1) 自己表現に対する気持ちの変化

4月と同じ自己表現に関するアンケートを12月に実施したところ、肯定的な回答が8割以上得られた。大会を経るごとに表現活動を通して感動体験を積み、自信がでてきたことがわかる。



生活アンケートの自由記述

- 合唱をやる前はプレッシャーに弱かったけど、合唱をやって、緊張はするけど前よりプレッシャーに強くなった。
- アルトの声を前は地声に近い小さな声で出していたけど、今はソプラノよりきれいな大きな声が出せています。
- 努力すればさらに上に行けることがわかったので、合唱のとき、口を大きく開けて歌えるように頑張っています。

自由記述からは、努力が結果に結びつくことを学び、自分なりに表現を磨こうとしている様子がみえる。特筆すべきは、学級には歌が得意な児童も苦手な児童もおり、資質・能力・意欲に個人差がある点である。互いの声を毎日聴き合うことで内向的な児童も安心感が得られ、周りに触発されて声を出すようになる。認め合い、支え合う共創活動の積み重ねを通して、支持的風土が各段に高まっていた。

9月校内音楽発表会

1月全琉音楽祭

上に、児童の変容を捉えた写真を示す。初めは声を出すことを控え、マスクを着用し、自信なさげに歌っていた児童も、最後の大会では堂々と豊かな表情で歌うことができた。後方で歌うことを希望していた児童が前列を志願する等、個々の表現意欲も向上した。普段、全員出席はまれであったが、5回すべての発表会に全員そろって参加できたのはまさに奇跡であり、児童が合唱の魅力に惹かれた証である。

(2) 不登校の改善

本学級には、仲の良い友達と学級が離れ不登校になってしまった児童がいた。時々顔を見せてくれていたため、会えた日には個別で練習を行い、勇気づけの言葉をかけながら全体練習に誘った。全体練習に来てくれたときは、級友との関係構築が図れる活動を積極的に取り入れた。合唱を通して同じパートに支え合う仲間ができると、練習時間に合わせて登校してくれるようになった。さらに、宿泊学習や運動会等の行事にも参加することができた。

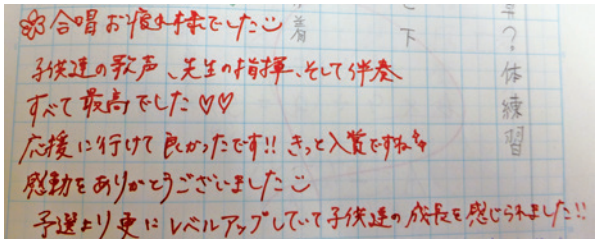
不登校だった児童が書いた夢

1月、全琉音楽祭で小学校部門第1位を意味する音楽祭賞を受賞することができたことは、本児にとっても大きな励みとなった。6年生に進級してからは「教師になりたい」という夢を抱き、毎日教室でみんなと一緒に学習できている。

(3) 保護者や地域からの温かい声援

1月 音楽祭賞を受賞し喜ぶ児童

学校に不安があった別の児童の保護者も、我が子の歌う姿に感動し、登校を後押ししてくれるようになった。子どもの活躍は、学校への信頼に繋がる。発表会を通して学級への関心が高まり、多くの保護者から素敵なメッセージをいただいた。



保護者からのコメント

全琉へ9団体・個人

全沖縄学校音楽発表会

【沖縄】第69回全沖縄学校音楽発表会（主催・県音楽教育研究会）が26日、沖縄市民会館大ホールで開かれた。審査の結果、来年1月20日に同ホールで開かれる第69回全琉音楽祭（主催・沖縄タイムス社、県音楽教育研究会）に9団体・個人を推薦することが決まった。

発表会では、県内各地区から選ばれた小学校22校、特別支援学校・中学校21校の児童生徒が美しい歌声などを披露した。結果は次の通り。（敬称略）

【小学校】仲井真小6年（学年合唱）▽池田真歩（船浮小6年・独唱）▽安里木葉（普天間小6年・同）▽越来小5年2組（学級合唱）▽美里小6年1組（同）

【特別支援学校・中学校】大里中2・3年（有志合唱）▽大城綾音、喜屋武陽菜、公文啓（首里中3年・重唱）▽嘉数中3年2組（学級合唱）▽宜野湾中3年2組（同）

全琉音楽祭への出場を決めた越来小の合唱＝26日、沖縄市民会館（小宮路雅彦）

令和5年12月27日
沖縄タイムス朝刊（社会面）

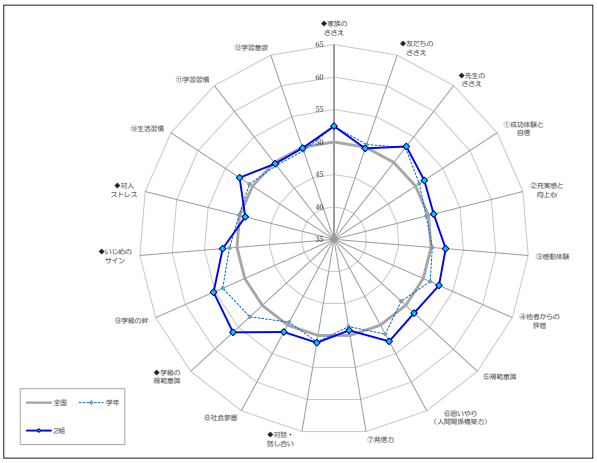
R5.12.27 沖縄タイムス記事

全琉音楽祭への出場が地元新聞で報じられ、本学級の写真が掲載されると、地域一体となる盛り上がりを見せ、開かれた学校づくりに貢献した。

4 検証結果の考察

全員の共創活動で県内259校の頂点に立てたことは、児童の心に残る経験となった。コロナ禍でなかなか経験させることのできなかった集団のよさや表現する喜びを十分に体得することができたといえる。

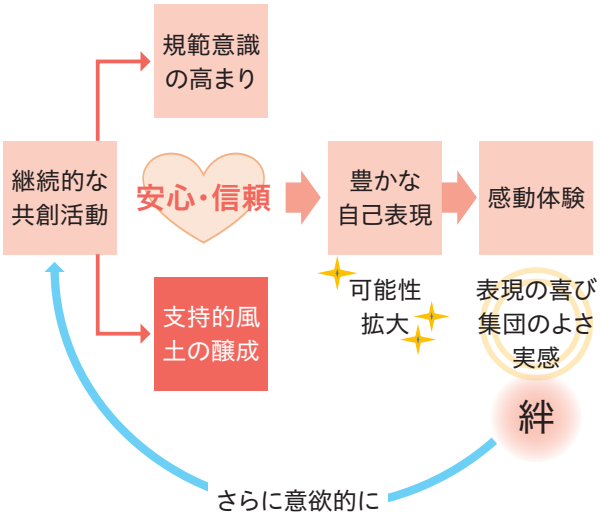
本年度、6年生に進級した児童を受け持っているが年度初めに行われたi-checkでは「学級環境」に関する数値が高く、特に「規範意識」「学級の絆」の項目は全国平均を5ポイント以上上回った。支持的風土の醸成や表現力の向上を念頭に学級経営を行ったが、意外なことに規範意識が最も高まる結果となった。



		全国 iスコア	学年 iスコア	学年 標準スコア	2組 iスコア	2組 標準スコア
自己認識	◆家族のささえ	3.4	3.6	52.4	3.6	52.4
	◆友だちのささえ	3.3	3.4	50.5	3.3	49.8
	◆先生のささえ	3.1	3.3	52.9	3.3	53.1
	①成功体験と自信	3.2	3.2	50.7	3.3	51.6
	②充実感と向上心	3.3	3.2	49.6	3.3	50.8
	③感動体験	3.0	3.0	50.2	3.2	52.3
	④他者からの評価	2.6	2.7	51.2	2.8	52.6
社会性	⑤規範意識	3.4	3.3	49.1	3.4	51.8
	⑥思いやり（人間関係構築力）	3.2	3.3	51.6	3.3	52.9
	⑦発信力	2.6	2.5	48.6	2.6	49.2
	◆対話・話し合い	3.4	3.4	51.0	3.4	51.1
	⑧社会参画	3.1	3.1	49.5	3.2	51.2
学級環境	◆学級の規範意識	2.9	3.1	52.6	3.3	56.1
	⑨学級の絆	3.3	3.5	53.7	3.6	55.3
	◆いじめのサイン	3.7	3.7	51.2	3.8	52.2
	◆対人ストレス	3.1	3.1	50.1	3.0	49.1
生活・学習習慣	⑩生活習慣	3.1	3.2	50.6	3.3	52.4
	⑪学習習慣	2.7	2.6	49.4	2.7	49.8
	⑫学習意欲	3.1	3.1	49.5	3.1	49.9
平均		3.1	3.2	50.8	3.2	51.8

令和6年度 i-check クラスの概要 レーダーチャート

合唱では、理想とする曲想の達成に向けて全員が一つの表現を目指して歌うためと考えられる。入場から退場まで決まった所作を行うことも影響しているかもしれない。いずれにしても、継続的に行った共創活動が要因であると考察する。規範意識が高まり、人間関係に対する安心感が生まれたことで支持的風土の醸成が助長された。結果として個性が発揮しやすい学級になり、豊かな自己表現が育まれたと結論づける。



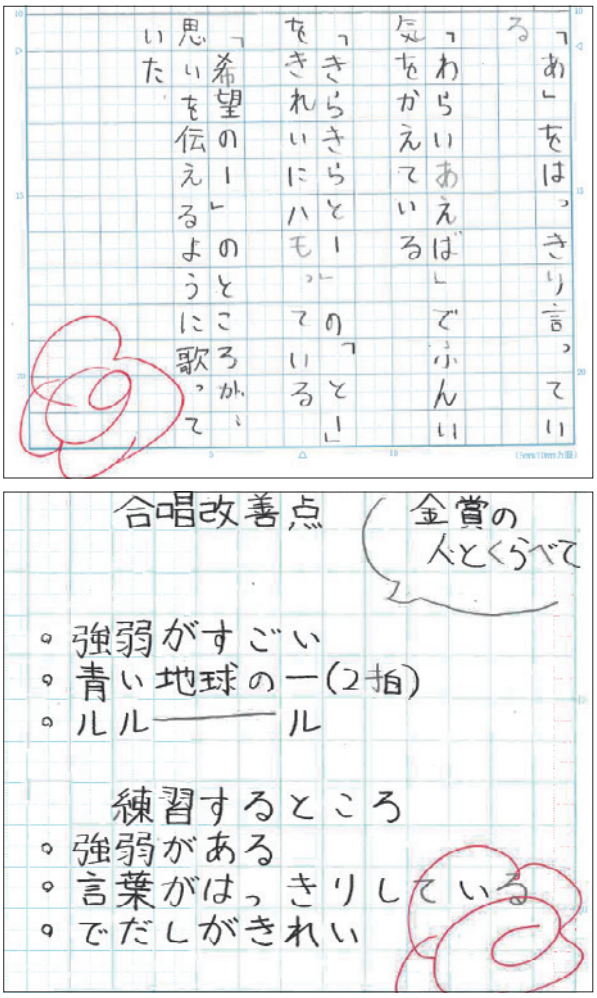
本研究における共創活動のサイクルイメージ図

男女分け隔てなく話し合い、グループ活動を進める児童

個々の表現力が高まることで児童のよさが存分に発揮され、学級の可能性が広がり、大きな感動体験を得た。現在も共創活動を積極的に行っているが、「継続は力なり」の言葉通り、活動がスムーズである。

5 今後の展望

本年度は「表現したいから歌う」をテーマに、新たな学級合唱に挑戦。「どう表現したいのか」工夫を考えさせ、話し合いを重ねることで発信力を磨いている。また、最高学年として「みんながリーダー」を合言葉に、引き続き表現力を発揮する場を設けている。練習は「今日のリーダー」が中心となって進め、準備運動からふり返りまで、号令や司会を務めている。



歌声を聴き比べ、改善したい点を書きだした児童のメモ

パート別に目標を確認する「今日のリーダー」

児童の表現意欲を支えるのは学級の仲間であり、仲間と得た感動体験であると確信する。今後も児童の豊かな表現力を引き出すことができるよう精進したい。

おわりに

本研究では合唱を共創活動の主軸としたが、合唱以外の共創活動であっても類似する効果が期待できると思われる。極力、担任の得意なことがよい。得意なことは指導がしやすく魅力が伝わりやすいためである。ここに本研究の汎用性がある。共創活動を継続することで、児童が団結し、学級に個性や強みが生まれる。実際に取り組んでみると、児童の圧倒的なエネルギーに驚かされる方が多かった。児童は無限の力を秘めている。担任が個性や強みを発揮し、得意分野を学級経営に生かすことで、児童の可能性が広がることを実感した。

表彰式では先生方の満開の笑顔が咲いた。
写真左から渡久地校長、荒谷教諭

荒谷教諭へインタビュー

1. 受賞されたご感想や今回の研究で得たものについて教えてください。

日々全国の優れた先生方が熱意ある実践をなさっているなかで、越来小学校の子どもたちの努力や絆にスポットライトがあたり、受賞という素晴らしい形で実を結んだ奇跡を幸せに思います。私一人では成し得なかった研究なので、一緒に頑張ってくれた子どもたちや、ずっと支えてくれた渡久地裕子校長、温かく見守ってくれた上間壮二郎主任、そして一番近くで応援してくれた家族に感謝を伝えたいです。

今回の研究で多くの学びを得ましたが、その一つを挙げるとすれば、記録の大切さです。記録を取ることで、指導の意義や効果を客観的に分析し、些細な変容を観察することができました。ひとりひとりの上達に目を向け、成長を積極的に捉えるため、前向きな言葉がけが増え、子どもたちとの信頼関係づくりに役立ちました。

2. 継続的な共創活動、学級合唱を進める上での課題や、苦労した点を教えてください。

コロナ禍で友達との関わりを控えていた児童や、思春期に差し掛かり、異性とのコミュニケーションに苦手意識を抱く児童もいるため、そのような児童に発話を促したり円滑なグループ活動にするためにフォローに入ったりするなど、共創活動が児童主体で機能するまでは少し苦労しました。

学級合唱は、部活動と違って様々な児童が集まって歌うため、音楽嫌いをつくらないように配慮することが求められます。合唱が苦手な児童には、他の授業で活躍の場を作るように心がけました。担任の強みを生かし、児童の個性を把握しながら指導できたのがよかったです。スポーツのように勝敗の要因がはっきりしているわけではないため、審査基準が分かりにくいと思うこともありましたが、子どもたちの感性を信じて、子どもたちらしさが表現できる合唱を追求しました。

3. 研究活動の中で特に印象に残っていることがあれば教えてください。

一番の思い出は、全琉音楽祭への出場です。音楽祭賞を受賞できたことはもちろん大きな喜びですが、校種を超えた様々なジャンルの音楽を全員で鑑賞できたことが嬉しかったです。初めてマーチングを見た子どもたちが感動し、興奮していた姿が印象に残っています。授業だけでは教えることのできない音楽の楽しさをみんなで味わうことができました。

共創活動を行っていた時、普段控えめでできなかった女の子が、初めて自分から手を挙げて全体の前で発表してくれた瞬間も鮮明に覚えています。周りの児童からも大きな拍手がありました。その子が卒業式の夢の発表で「人に感動を与えられる歌手になりたい」と言ったので、さらに驚きました。児童の成長する力、友達の支えや励ましの力の偉大さを改めて感じました。

4. 研究を通して、先生や児童にどのような変化がありましたか？

これまで、学年で足並みをそろえ、他学級と差がでないことを優先していました。しかし、本校ではWell-beingを掲げる渡久地校長のもと、個人研究や校内研修においても主題の自由設定が認められ、やりたいことに時間を割く環境が整いました。今回の研究を通して「教員が個性を発揮することと輪を乱すことは違う。職場でも好きなことや得意なことを生かした方がいい！」と思えるようになりました。

また、児童の表現力が向上したことで、「この子たちならこんなこともできそう！あんなこともさせてあげたい！」というアイディアが湧き、学習発表会で地域劇を創作したり、卒業式でオリジナルの門出の言葉を考えたりと、前例踏襲が当たり前となっていた行事で新しいことに挑戦することができました。児童の表現力向上に勇気づけられ、私の行動力も向上しました。

5. 同様に共創活動の取り組みや表現力の向上にチャレンジする先生方に向けて、メッセージをお願いします。

共創活動は先生方の得意分野を主軸に据えた方が楽しく取り組めます。反省は、得意分野だけに理想が高く、指導に欲が出やすい点です。全く歌わないと思っていた児童の保護者から、「我が子が変わった！お風呂場で毎日歌っている」と喜ばれたことがありました。また、友達同士で教え合う方が高い効果を得られることもありました。結果を焦らず、児童の力を信じて委ねることも必要だと感じています。

表現力向上の鍵は、規範意識なのかもしれません。安心できる人間関係があれば自分をさらけ出すことができます。技術面で言えば、指導者が積極的にモデルを示すことです。恥ずかしくて表現できないのではなく、そもそも何をどのように表現したらよいのかわからない児童もいます。模範例を示すことで理解が深まり、自信をもって表現できるようになると考えます。

心に残る

一期一会

石川 庸子
埼玉県川口市立青木中央小学校 校長

「今日ね、懐かしい子が訪ねていらしたのよ。覚えているでしょ。K君。」弾んだ声で実家の母から電話がかかってきた。結婚を機に埼玉県の採用試験を受け川口市へ。川口市へ赴任する前、静岡県（掛川市）で3年教職に就いていた。書斎に飾ってある、あのクラスの集合写真。30年の時を経てもあの子たちの笑顔は今も輝いている。その中に、K君はいた。

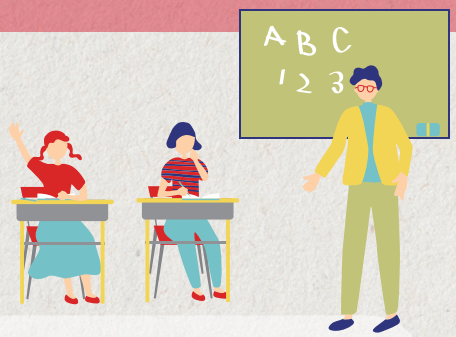
心がまっすぐで慎重派。屈託のない笑顔が輝く子だった。低学年で開頭手術を受け、若干不自由さがある子だった。初任者の私は、特別な配慮もせず他の子どもたちと同様に対応した。漢字練習も自主学習も体育も全てにおいてである。6年生の夏、来年は中学生になるからとK君のお母様と相談して、プールに入ることに挑戦した。シャワーも数年ぶりのK君に「気持ちいいよ」「大丈夫だよ」と声をかけたことが思い出される。そして、プールに少しずつ慎重に入り、満面の笑みがこぼれていたことも。家庭科のエプロンづくりもどんなに時間がかかろうとも最後まで頑張って完成。本当によくやり切ったものだと感心する。今思えば、「もっとスモールステップで配慮するべきだったのに」とあの頃の私を叱ってやりたい思いでいっぱいになる。そのK君が静岡（焼津市）の実家を訪ねてくれたことは、衝撃であった。

思い切って夏季休業を利用し、初任でお世話になった学校に伺った。夏季休業中で静かな校舎を眺めながら当時のことが次から次へと思い出される。K君に会ってみよう。当時の記憶をたどり、K君宅へ。不在ではあったが表札にK君の名前がある。名刺にメッセージを残してポストに入れた。

暫くして電話がかかってきた。「庸子先生。わかりますか。ぼくです。Kです。」もう胸がいっぱいで、声にならない。「…わかるよ。…元気ですか。」それが精いっぱいであった。K君からは、保護司会の会議に裁判員制度のことについて説明に行ったら、名簿に私の旧姓を見つけたこと。以前、私の実家に遊びに行ったときに母が着物でいた姿と今の姿が重なったことなどから、私の母だと確信したそうである。そして、記憶をたどって訪問したとのことであった。相変わらず抜群の記憶力である。仕事のこと、家族のこと、当時のクラスメイトの今について話は尽きなかった。意気揚々と話す声が嬉しくて頼もしくて。話を聴きながらも、一方で至らぬ自分が脳裏に浮かぶ。最後に「K君、私…。あの頃、十分な心遣いができなくて本当にごめんなさい。」。思わず涙が頬を伝う。「そんなことないですよ。庸子先生は、いつも公平にぼくのことを見ていてくれました。それから、覚えていますか。先生がほとんど毎日クラスのみんなに言ってくれていたこと。『人の心の痛みのわかる人になってね』って。…支えてくれて、本当にありがとうございました。」

教育は、共育であることを実感する。「教師」という一道を貫いてこられたのは、子どもたちのおかげである。一期一会。これからも心から声援を送り続けたい。

子どもたち



夢って叶うんですね

五十嵐 裕子
福井県立福井商業高等学校 教諭

映画「チア☆ダン～普通の女子高生がチアダンスで全米制覇しちゃったホントの話～」

広瀬すずさん主演のこの映画は、私が創部したチアリーダー部JETSの実話を描いたサクセスストーリーです。私の役を天海祐希さんが演じて下さっています。また土屋太鳳さん主演のドラマ版「チア☆ダン」では映画では描ききれなかったJETSのエピソードが盛り込まれ、オダギリジョーさん演じる顧問の先生には私の失敗談が描かれています。こちらも元気の出る青春ストーリーです。

JETSはこれまでに9回の全米大会優勝の実績があり、その生徒数は200名近くにのぼります。ジェット噴射するが如く成長し、アメリカで堂々と演技し結果も出す生徒たちは私の誇りです。現在も50名近くの生徒たちが毎日切磋琢磨しています。

映画の中で、「先生、もうやめますわ」と言って私に反旗を翻し退部する生徒が数名出てきます。実話は、その数25名。2年生は全員退部です。引退していた3年生も私に反発していましたから2年生と3年生は、私とはひとことも口をきかず卒業していきました。自分の無力さに苛まれる出来事でした。

彼女らが卒業して数年後。その中の一人が私に会いに来てくれました。高校時代は「先生、ここ福井ですよ！アメリカなんて行けるわけないじゃないですか！」と全米制覇を目指す私に猛反対した生徒です。彼女はCAを目指すため専門学校に進学したのですが、今ようやく「先生の言っていた意味が分かった」というのです。35歳になった今でも私の元を訪ねてくれますが、私の数々の教えを活かして生きているそうです。「夢ノート」はその一つです。夢や目標を書き込むノートですが、それを使って仕事やプライベートの夢を叶えているというのです。

「先生、夢って叶うんですね！」高校時代は「そんな夢叶うはずない」と思っていた彼女の言葉です。教え子たちの成長や変貌ぶりから「人は変われる」と教えられてきました。ただし目の前の生徒たちは思春期真っ只中。なかなか火のつかない生徒、火がついてもすぐ消えてしまう生徒、火がつく見込みすらないのか？と思う生徒。そんな生徒に私の心の火が消えそうになります。でも、私は生徒を信じて、一人でも多くの心に火をつけられる存在でありたいと魂を磨く毎日です。

第3回

「健康と食事」
～漢方の視点から～

岩井 正憲 薬学博士

祖父の代から続く漢方専門調剤薬局の三代目として大阪市に生まれる。
1992年富山医科薬科大学（現富山大学）大学院博士課程修了。薬学博士。大学時代より、中国・韓国・ネパール・インドなどで薬物の現地調査に従事。
現在はTV・新聞・雑誌などで漢方薬の解説やコメンテーターとしても活躍。2001年から続く東京・大阪のホテルニューオータニの薬膳料理「好菜（ハオツァイ）」の総合プロデューサーをはじめ、数多くのホテルで「健康と食事」を指導。
2003年にはニューヨークで日本人として初めての薬膳セミナーをプロデュースし成功をおさめる。著書に『21世紀の生薬・漢方製剤』（共著）がある。
国際個別化医療学会評議員、日本東洋医学会代議員兼関西支部副支部長。

新しい学期を迎えて

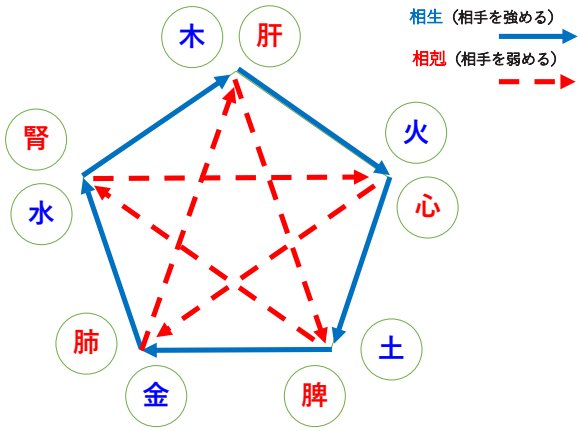
早いもので新学期が始まり、多くの先生方が緊張の続く日々を過ごされているのではないでしょうか。5月になりますと医療現場にも「五月病」と云われる身体の不調を訴え相談に来る方がおられます。主な訴えは「気力がない・憂うつ」といった精神的な問題と「眠れない・食欲がない・下痢や便秘の胃腸障害・脱力感」などの肉体的な問題です。その原因も様々ですが、環境変化に対応するためのストレスが影響していることが原因の一つと云われています。

「漢方」でも精神的な問題を解決することはなかなか難しいのですが、東洋医学では「気」の落ち込みは「肝」の働きが弱っていると考えます。「肝」と云っても肝臓そのものを云うのではなく「肝」とは自律神経や精神の安定、「血」をためておく大切な働きをするところと考えます。つまり「肝」の働きが弱いと「気」の流れもうまくいかず、精神状態を立て直すためのパワーも生み出されません。前回お話ししました「気・血・水」のバランスも崩れ、「血」の流れも悪くなり「冷え」の原因にもつながります。

陰陽五行説

東洋医学では「陰陽五行説」という考え方があります。2300年前の中国最古の医方書「黄帝内経」にも記載され、何事も「陰」と「陽」、森羅万象すべては五つの

【図①】「五行と五臓」の相関図



バランスで成り立つという考え方です。

「五行」とは「木・火・土・金・水」を云い、それぞれ「木⇒火⇒土⇒金⇒水」の流れが大切と考えられています【図①】。

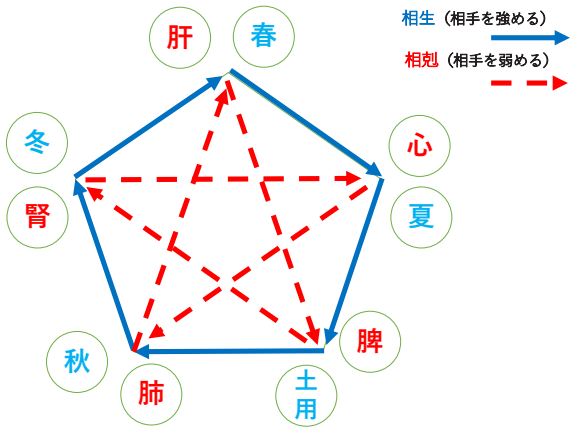
つまり「木」を擦り合わせると「火」がおこり、「木」が燃え尽きると「土(灰)」となり、やがて「土」が集まり「金(鉱物)」となり、鉱物の間から「水」が湧き出て、その「水」が再び「木」を育てるというように次へと影響を与え強めることを「相生」といい、逆に「木」は「土」のエネルギーを奪い取り、「火」は「金」を溶かし、「土」は「水」を吸い取り、「金」で出来た固い斧は「木」を切り倒し、「水」は「火」を消すという、それぞれに影響を与え弱めることを「相剋」と云います。すべて5つのバランスで成り立つことが「陰陽五行説」の考え方です。

「五臓」と「五季」

身体も「五臓(肝・心・脾・肺・腎)」に分け、「肝」の働きが活発になれば「心」の働きも良く、「心」の働きが活発になれば「脾」の働きも良くなるというように「五臓」の働きも五行のように次々に流れていくように考えられています。

「五臓」の働きは季節とも関係し、季節も「五季(春・夏・夏の土用・秋・冬)」に分かれます【図②】。

【図②】「五臓と五季」の相関図



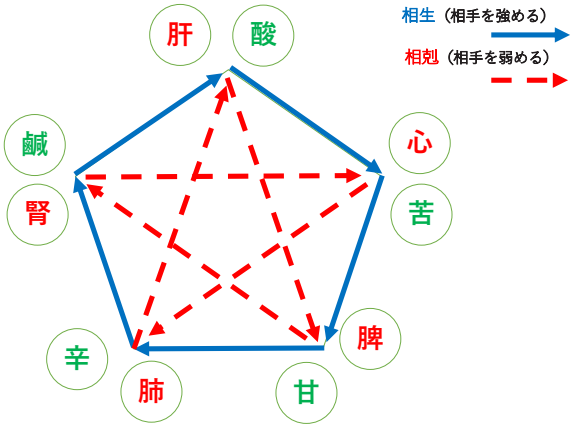
各々の季節に応じた「五臓」の働きが重要であり、「春」の季節は「肝」の働きが大切です。身体を休めていた「冬」が過ぎ、新しいエネルギーが芽生える「春」の季節に眠っていた身体を目覚めさせるためには「肝」の働きが必要となるのです。

自律神経や情緒を安定させる「肝」の働きによって精神状態も安定し、全身の「気」の流れも良くなり、睡眠や食欲も安定するのだと考えられています。

「肝」に役立つ食べ物

では、東洋医学において「肝」の働きに役立つ食べ物とは何か?「五臓」と「五味(酸・苦・甘・辛・鹹)」の相関から「酸」すなわち「酸っぱい食材」が「肝」に役立つと考えられています【図③】。

【図③】「五臓と五味」の相関図



調理方法によって食材の「五味」は変化しますが、「肝」に良いからと「酸っぱい物」ばかり摂り続けると「脾」を弱らせることになり、「脾」の良否の現れである「唇・皮膚」においては食べ過ぎると「唇が捲れあがって、皮膚がカサカサになる」という薬膳の考え方にも注意しなければいけません。しかし「脾」の働きを助ける「甘」を同時に摂ればその問題は解消されます。中華料理で人気の「酢豚」は、まさに「酸」と「甘」を両方使った「食の二相性」が表現された素晴らしい料理のひとつと云えるでしょう。

「以類補類」という「薬膳」

薬膳には「以類補類（類は類を以て補う）」という考え方があり、「身体に弱い部分があれば、それと同じ部分の食材を摂って補う」というシンプルな考え方です。

気力が出ない時にはエネルギーの詰まった種子や木の芽などを食したり、足腰が弱くなると強靭な動物のアキレス腱を食してそのパワーにあやかりたいなどの考え方です。

つまり「肝」の働きが弱いならエネルギーの満ちた新鮮なレバーを食して補うということを古くから「薬膳」では実践しています。

また、季節に応じて「旬」の食材を食することは「五臓」の働きにとっても重要なことで、「春」には木の芽など自然のパワーエネルギーを補給することで「肝」の活発な働きを期待することも「薬膳」の考え方です。

朝食はしっかりと

これから梅雨を迎え暑い夏が近づいてまいります。環境の変化に耐える身体づくりには、まずは朝食をしっかりとバランスよく摂ることが大切です。人の身体に必要な6大栄養素は「炭水化物・脂質・タンパク質・ビタミン・ミネラル・食物繊維」ですが、どれも朝食からしっかり摂るようにしなければいけない栄養素です。

とくに忙しく不規則な食事が続くのであればミネラル分の不足にも注意しなければならないでしょう。運動中や就寝中に「こむら返り」を経験されたことはないでしょうか。その原因はいまだ明確ではありませんが、一説によると随意筋の筋肉疲労に加えて、ミネラル不足が原因ともいわれています。

身体に必要なミネラル補給

人の身体に欠かせないミネラルとして「カルシウム・ナトリウム・カリウム・マグネシウム・亜鉛」を含め16種類といわれていますが、「こむら返り」に関係するミネラルとして「カリウム・マグネシウム・カルシウム」の3種類が挙げられています。

少なくとも朝食に出された野菜や味噌汁、小魚などから必要なミネラルを忘れずに摂取することは大切です。ちなみに「カリウム」が多い食べ物として「リンゴ・バナナ・干し椎茸・ユリ根・蓮根・ハスの実・ホウレン草・タマネギ・そら豆・枝豆・昆布・キクラゲ・アボカド・里芋・サツマイモ・パセリ・シソ・ナス・ニラ・ニンニク・春菊・ショウガ・タケノコ・トマト」などが挙げられます。

「マグネシウム」が多く含まれる食べ物として「ホウレン草・小魚・昆布・ヒジキ・ゴマ・ナッツ類・胚芽米・ココア」などが挙げられ、「カルシウム」が多い食べ物として「牛乳・小魚・パルメザンチーズ・ヒジキ・ワカメ」などが挙げられます。

梅雨の時季に備えて

これからの梅雨の時季には「気・血・水」の「水」の役割が重要となります。漢方では水分代謝が悪くなる状態を「水滞」あるいは「水毒」と診断し、むくみ状態を放っておくと「血」の巡りや「気」の乱れにも影響を与え脳梗塞や心筋梗塞などの危険な疾病の原因にもつながると考えます。寝不足や運動不足も水分代謝に影響を与えますので、適度な休養と運動を心掛けることが大切です。

薬膳的には「冬瓜・キュウリ・スイカ」などのウリ科の食べ物には利尿効果があり「アズキ・大豆・黒豆・緑豆・とうもろこし・セロリ・タマネギ・ネギ・白菜」などの身近な食べ物も余分な水分の排泄に役立つと考えられています。

梅雨の時季やこれからの暑さ対策としてまずは朝食でミネラル分をしっかり摂り、日頃から「食餌」ではなく「食事」の意味を意識して健康維持に努めていただきたいものです。

次回はいよいよ最終回です。引き続き身体に役立つお話をさせていただければと思います。

甘酸っぱい「紅ほっぺ」と甘さが際立つ「きらぴ香」を育てる

My Second Life vol.21

体育教師からいちご農家へ ゼロからのスタート

なべさんのいちごや

渡邉 智之 さん〈65歳〉

雄大な富士山を背景に、「なべさんのいちごや」ののぼりがたなびく。静岡県富士宮市、渡邉智之さんが夫婦で営む直売所の目印だ。

渡邉さんは定年を迎えるまで中学校の体育教師だった。柔道部の顧問を長年務め、柔道部のない学校では野球部顧問。厳しい指導で知られた。自身も日本体育大学柔道部で名を馳せ、強豪校の静岡県伊豆地域の中学に請われて赴任したが、教師7年目に父親の看病のために地元である富士宮市の中学校へ異動となった。

異動先では野球部顧問になったものの、伊豆の教え子たちが週3日、保護者とともに1時間以上かけて渡邉さんに柔道を習いに通ってきた。その教え子の一人が、後に渡邉さんのいちご農家の師匠になるのだから人生は面白い。

定年後の生活を考え始めた58歳のときにはコロナウイルス感染症が流行し、部活動も休止。さてどうしたものかと考えていた時に、「先生は柔道の練習も緻密な計画を立てるし、一つひとつの計画に理由が明確にある。そういう繊細なところはいちご農家に向いているよ」と、いちご農家のせがれである教え子から思いがけないアドバイスが。初期投資が少額で済む点にも惹かれ、伊豆にある教え子の元へ見学に行ったのが始まりだった。

農業は未経験の世界。教え子に教えを請い、勉強し実践した。努力した分だけ応えてくれるいちご栽培に魅力を感じ、定年後はいちご農家になることを決意。しかし、初期費用には想像以上に多額な費用がかかることになり頭を抱えた。相談に行った農協や市の農政課も、新規就農はこの10数年一人もいないから無理だと言う。

渡邉さんは諦めなかった。無利子の融資「青年等就農資金」の書類を、管理栄養士の妻・典子さんと力を合わせて何度も書き直し、19回目にしてようやく受理され融資が実現。勤務する学校も、校長をはじめ教師仲間がカリキュラムを調整するなどして応援してくれた。教え子と保護者たち、そのまた繋がりの地域の人たちが、ハウスを建てる土地を平らにならし、直売所を建てるのを手伝った。そして定年を迎えた年の9月、富士宮市内最大級の、5棟1500㎡のハウスが完成したのである。

「恐い教師だと思われていたはずですが、事あるごとに教え子たちが助けてくれるのです。今でも朝6時に相談の電話を鳴らしたりして、迷惑な元教師ですね（笑）。教えてほしいことがあれば、車を飛ばして教えを請いに伊豆まで行っています」。

昨年子どもを授かり、「すず」と名付けた。「この子が成人するときは84歳です。健康なら何でもできる。全国の教職員の皆さんには、とにかく健康でいましょう!と伝えたいです」。

愛娘に誇れるいちごを育て続け、経営を盤石にするのが目下の目標だ。ゼロからスタートした「なべさんのいちごや」は京都や山梨などにもファンを広げ、焼き芋や落花生、アイスクリームにジェラートと、夫婦でお客さまのリクエストに応える。ケーキ屋さんからのいちごの買い付けも後を絶たない。順調な5年目を迎えている。

直売所にて。
左から、渡邉智之さん、妻の典子さん、
愛娘のすずちゃん（撮影時は生後5か月）

後輩教師が作成した「なべさんのいちごや」のロゴ（左）。苺の漢字をよく見ると「ありがとう」の文字が

公式Instagram

わたしたちの
学校自慢
専門高校シリーズ vol.16

兵庫県立舞子高等学校

語り継ぐことを止めない
～環境防災科の取り組み～

死者・行方不明者合わせて6,437人、負傷者は43,792人にのぼり、全壊家屋10万棟以上となった戦後最大（当時）の震災「阪神・淡路大震災」が発災したのは1995年1月17日5時46分。

兵庫県立舞子高等学校「環境防災科」は、この阪神・淡路大震災の経験と教訓を受け継ぐ次世代の防災リーダー育成のため、2002年に全国で初めての「防災専門学科」として開設され、この4月に24期生を迎えた。災害に対する備えの大切さ、地域コミュニティの防災力の大切さ、災害に強いまちづくりの大切さ、命の大切さ、助け合いのすばらしさを語り継いでいる。

今の生徒たちは震災を体験していない世代。語り継ぐためには、震災を直接体験していない「未災者」だからこその学びの視点と継続性が必要だと、富永和典校長は語る。「体験者の話を丁寧に聴きとり、自分で考え、外部に向けて発信するという具体的な活動を、様々な角度から実践しています。震災時、大火災に見舞われた神戸市長田区を歩く「長田まちあるき」、災害ボランティア活動や小学校への出前授業、消防学校体験入校など、その活動は多岐にわたっています。卒業間近には体験記として一人ひとりが執筆し、『語り継ぐ』という冊子にまとめるのですが、これは学科開設以来継続している取り組みです。冊子を読むと、教員や生徒たちの様子や変化、成長がよく分かります」。

年に3回行われる校内避難訓練も、環境防災科の生徒たちが仕切る。けが人役の教員の一部にしか知らされない抜き打ちの避難訓練は、緊迫した空気に満ちていると評判になるほど。突然、緊急地震速報が校内に流れると、「淡路島北部を震源とし、神戸市垂水区は震度６強です。震度6強です」「余震が続いています。身の安全を確保してください」「火災発生、火災発生」など、刻々と変わるアナウンスが響き渡る。校内のどこを通れば安全か、教員も生徒も汗だくになり、声を掛け合い状況確認。けが人役を運び、教員は連携して生徒を誘導するといった避難訓練だ。都度反省点をまとめ、学校の防災マニュアルに反映させるが、マニュアルも環境防災科の生徒たちによってアップデートされる。

東日本大震災や熊本地震、能登半島地震など、現地で支援活動をする中で、卒業生が活躍する他団体と出逢うこともある。「ここで学んだ生徒たちが、人生の次のステージの中でも防災に携わり、リーダーとなって地域を守って欲しい。社会的弱者といわれる女性や子どもたち、障がいがある人たちの視点など、人権意識も大切にしていってほしいと願っています」。震災時、教師になって2年目だった富永和典校長も、人権と防災について、そして自身の体験を生徒たちに伝えている。

教頭の三浦巡氏は、震災当時30歳。生徒や卒業生を震災で亡くしたが、環境防災科開設に尽力し、1期生2期生の担任を務めた。教員にも未災者が増えてきた今だからこそ、語り継ぐことを止めてはならない。環境防災科の使命はますます大きくなっている。

災害ボランティア（令和6年能登半島地震）

災害支援のための募金活動をする生徒たち

学校HP

小学校への出前授業

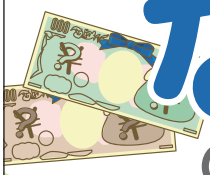
長田まちあるき

消防学校体験入校

教職員のみなさまへ

小学生向け 体験型・
金融教育コンテンツ

お金ってなに?のご案内



産学連携により、それぞれが有する知識・ノウハウを活かして子どもたちの「生きる力」を育成するため、東京学芸大学、東京学芸大こども未来研究所、ジブラルタ生命の三者は、2013 年にリリースした小学生向け金融教育コンテンツ「お金ってなに?」を、これまでの共同研究・実施検証によって培った知見を活かし、全面リニューアルしました。小学生の金融教育にご活用頂ければ幸いです。

編集・発行:東京学芸大学・東京学芸大こども未来研究所・ジブラルタ生命共同研究プロジェクト

後援:公益財団法人　日本教育公務員弘済会

コンテンツのポイント

✓小学校５年生からの家庭科学習指導要領に準拠しています。

✓カードゲームやクイズ･グループワークなど、児童参加型の授業（アクティブ・ラーニング）の要素があります。

✓出前授業の受付に加え、学習指導案で教員による授業実施をサポートします。

コンテンツの内容

①お金ってなに？

カードゲームを中心に、お金の成り立ち・役割について体験します。

②お金の使い方の多様化

多様化する支払い方法や消費について学びます。

③ものの選び方･買い方

購入する際の商品の比較をするポイントについて学びます。

ジブラルタ生命保険株式会社

本社/〒100-8953　東京都千代田区永田町2-13-10

通話料無料　教職員のお客さま　**0120-37-9419**（ミナ キョウ イク）

受付時間:平日 9:00～18:00　土曜 9:00～17:00（日･祝･年末年始を除く）

本広告の掲載内容に関する問い合わせは、共済事業（提携保険事業）提携会社 ジブラルタ生命保険株式会社 ライフプラン･コンサルタントへご連絡ください。
もしくはジブラルタ生命保険株式会社「金融教育プロジェクト」までメールにてお問い合わせください。≫ Mail:GIB_mail.kinyukyoiku@gib-life.co.jp

広告

国内外20万ヵ所以上のサービスがお得に！

福利厚生サービス「日教弘クラブオフ」

日教弘クラブオフへのログイン方法

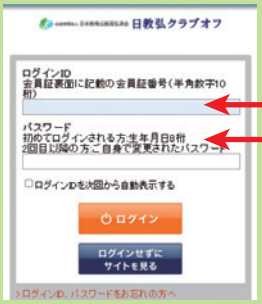
STEP. 1 日教弘クラブオフの専用ホームページへアクセス。

スマホでアクセス

パソコンでアクセス

https://www.club-off.com/nikkyoko/

STEP. 2 ログインIDとパスワードを入力してログイン。



ログインID
会員証に記載されている「支部コード(2桁)」＋「会員番号(8桁)」計10桁の半角数字

初期パスワード
ご自身の生年月日(半角数字8桁)
※例:2003年4月15日生まれ → 20030415
※初期ログイン時にパスワードを変更いただきます。

さらにログイン後に

クラブオフアプリをダウンロードして、もっと便利に！

CLUB OFF

App Store からダウンロード iPhone はこちら

Google Play で手に入れよう Android はこちら

動画でわかる！アプリの使い方

※Apple および Apple ロゴは、米国およびその他の国で登録された Apple Inc.の商標です。
※Google Play および Google Play ロゴは、Google LLC の商標です。

Topic 日教弘クラブオフで使える！人気グルメが続々と新登場！

身近で手軽に使えてうれしいお得なグルメ特典！ランチ休憩や休日のおでかけにご活用ください！

みんなの食卓でありたい。松屋

会員特典 申込No.5098193

定番の牛めし類 50円引

※対象商品:牛めし、ネギたっぷり旨辛ネギたま牛めし、鬼おろしポン酢牛めし、チーズ牛めし、キムチ牛めし

NEW

わたしの街の台所 ほっかほっか亭

会員特典 申込No.5098191

唐揚1コまたはコロッケ1コまたはほっかハッシュポテト1枚をプレゼント

NEW

STEAK ステーキガスト

会員特典 申込No.5012818

お会計より10%OFF

NEW

手軽に使えるグルメ特典は、ほかにもたくさん！
日教弘クラブオフの専用ホームページTOPページの「カテゴリー覧」⇒「グルメ・レストラン」からご確認ください！

●日教弘クラブオフに関するお問い合わせは
0800-919-6189 まで。通話料無料 営業時間10:00～18:00(年末年始除く)

※掲載内容は2025年4月現在の情報です。予告なく変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
※特典をご利用の際は必ず日教弘クラブオフホームページをご確認ください。※画像はすべてイメージです。

※表紙写真：「西ノ内紙」の紙漉き体験
手づくりの卒業証書

地域の教育資源を活かした教育活動を

茨城県常陸大宮市立大賀（おおが）小学校

常陸大宮市の小中学校では、地元の伝統工芸品で県無形文化財の和紙「西ノ内紙」を使った卒業証書が卒業生に贈られています。

そこで本校では、毎年12月に6年生が西ノ内紙の紙漉きに挑戦し、自分の卒業証書を作る体験学習を行っています。今年度も6年生が工房に行き、西ノ内紙職人の方の手ほどきを受けながら、紙を漉きました。卒業式では、世界に一つしかない自分の手で漉いた西ノ内紙の卒業証書を学校長が一人ひとりに手渡します。

本校では、こうした地域の教育資源を活用し、地域への理解や愛着を深める教育活動に力を入れています。

木枠を真剣に動かしながら原料を均等にします

タオルを使って丁寧に手のひらで押して水分を取ります

位置に気をつけながら漉いた紙と紙の間に校章をはさみます

高温の板にあてて乾燥させると、和紙ができあがります

卒業式では自分自身が漉いた卒業証書が手渡されます

〒319-2213
茨城県常陸大宮市小祝218-2

【鉄道・自動車】
● JR水郡線「常陸大宮駅」から車で10分
【学校HP】
https://www.fureai-cloud.jp/oga-es

日教弘マークについて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会<略称:(公財)日教弘>は、
都道府県を含む総称を「教弘」としていることから、
アルファベットの「K」がそのイニシャルです。
「K」を中心にした楕円形は、日教弘本部・支部が一致協力して事業推進していることを象徴しています。
全体のイメージは、未来への飛躍を展望したものです。

公益財団法人 日本教育公務員弘済会<略称:(公財)日教弘>の教育振興事業(奨学事業、教育研究助成事業、教育文化事業)及び福祉事業は教弘保険の契約者配当金により運営されており、日本の教育界に貢献しています。

公益財団法人 日本教育公務員弘済会　https://www.nikkyoko.or.jp/

きょうこう vol.51　発行／公益財団法人 日本教育公務員弘済会
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6 教弘会館2階　TEL 03-3354-4001(代) FAX 03-3354-4068
印刷／共同印刷株式会社